一般演題(口演) | 内科・外科

2026年11月20日(金) 10:15 ~ 11:05 | 第9会場（1F 会議室101-A）

一般演題（口演） 3　炎症性腸疾患 3

座長：横山 薫（北里大学医学部　消化器内科学）

[O3-2] 潰瘍性大腸炎に対するイムノピュアを用いた週2回の血球成分除去療法の有効性と寛解に影響する背景因子の検討

*杉山 浩平[1,2]、太田 隆聖[1]、黒澤 香織[1]、長澤 英幸[1]、宮川 麻希[1]、那須野 正尚[1]、田中 浩紀[1] (1. 札幌IBDクリニック、2. 札幌中央病院消化器内科・内視鏡内科)

【目的】潰瘍性大腸炎(UC)におけるイムノピュア(IMP)の有効性に関する報告は少ない．今回我々は，IMPによる週2回の血球成分除去療法(intensive IMP)が施行されたUC患者を対象とし，寛解率および寛解に影響する背景因子について検討した．

【方法】2020年9月から2026年1月の間に，初回IMPから少なくとも2週間，intensive IMPが施行されたUCのうち，Lichtiger Clinical Activity Index (CAI)≧5であった66例を対象とした．IMPは原則として計10回施行し，10回目のIMP施行日から4週以内に最終評価を行った．CAI≦4を寛解とし，最終評価日における寛解率，寛解例における寛解までの期間を解析した．最終評価までに新たな寛解導入療法が行われた症例は無効とした．さらに，寛解群と非寛解群に分類し，寛解に影響する背景因子を単変量解析および多変量ロジスティック回帰分析により検討した．

【結果】患者背景は，男性36例・女性30例，年齢39.0歳，罹病期間3.9年，CAI 8，CRP 0.14mg/dL，Alb 4.2g/dL，Hb 13.5g/dL，血小板数28.5万/μL(いずれも中央値)，全大腸炎型42例・左側大腸炎型12例・直腸炎型12例，ステロイド依存性38例・抵抗性6例・ナイーブ22例であった．併用薬は，経口5-ASA製剤48例，局所5-ASA製剤22例，プレドニゾロン(PSL)9例，免疫調節薬8例，生物学的製剤18例であった．最終評価日における寛解率は45%(30/66)であり，寛解例30例における寛解までの期間は17.5日(中央値)であった．寛解群は非寛解群と比較してCAIが有意に低く(7 vs 8, P=0.029)，PSL併用率が有意に低く(3% vs 22%, P=0.033)，経口5-ASA製剤併用率が有意に高かった(87% vs 61%, P=0.027)．多変量ロジスティック回帰分析では，CAIおよび経口5-ASA製剤併用が寛解に影響する独立因子として抽出された．寛解率は，CAI 10–14，7–9，5–6でそれぞれ18%，56%，64%であり(P=0.011)，経口5-ASA非併用例と比較して併用例で有意に高かった(22% vs 54%, P=0.027)．

【結論】UCにおけるintensive IMPの寛解率は45%であり，寛解に至るまでの期間は17.5日であった．CAI低値・経口5-ASA製剤併用が寛解に影響する可能性が示唆された．

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会